
ありがとう。

春野あずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう。

【Nコード】

N9242B

【作者名】

春野あずさ

【あらすじ】

平凡高校生、石垣徹也いしがきてつやは隣の家に住んでいる幼馴染、笹田遙茄ささだはるかのことが好きだった。朝の登校の時、遙茄にいつも手をひかれているだらしない徹也。そんな徹也が大切な人との別れを通して自立する…そんな切ない物語。

遙茄が死んだ

彼岸花の咲き誇る季節だった。

それははたからみれば一瞬の出来事。

俺からみるとそれは長い長い出来事。

人によって幸福や悲しみの感じ方は違う

-
-
-

それははたから見れば一瞬の出来事。

俺から見れば悲しくて悔しかった、長いような短いような

-
-
-

たった一日の淡い思い出だろう。

こんなことあってよかったのだろうか。
いやあってよくない。

今日は、本当は、「いつも」という日々を組み込まれるべき一日だった。

*
*

ぢりりりりりりりりりりり。

俺の脳を呼び覚ますべく鳴り続けた。

音はどんどん増していく。本当は気づいてた。その音に。起きなければいけないことに。

別に時計がポンコツなわけではない。五月蠅いからだ。むしろくしやるからだ。起きたくない。ただその思いからきた時計への八つあたり。

「んだよ…。俺なに時計なんかにはつあたりしちゃってるわけ？」

ただいまの時刻
…七時五十九分…は？

俺は自棄になり強かに目覚まし時計を蹴りつける。本日二度目の無実の時計への八つあたり。

「徹也てつやあああああああああああああ！！！！！！！！！もう、遙はるか茄かち

鬼神のような母の声は一階のキッチンにいるにも関わらず俺の耳の

中に、しっかり届けられた。

『鬼婆』という言葉がよく耳に馴染んだ。俺はこうもしていられない、と急いで制服に着替える。俺は 秘技・制服十秒着替え を習得しているので十秒で制服に着替える。

急がなければ…。遙茄を待たせるわけにはいかない。早く…。早くしなければ…。

ところで遙茄は俺の家のお隣さんの幼馴染である。本名・笹田遙茄^{ささだはるか}。

中学のときに一緒に学校にいく約束をしてからお隣のよしみでいつも迎えにくる。学校は俺と同じ都立晴海ヶ丘高等学校。学年も同じ。隣のクラス。長い髪をいつも二つに縛っていてけっこう優しい。

そして、まだいってなかったが俺の名前は、石垣徹也^{いしがきてつや}。都立晴海ヶ丘高等学校一年生。特技は、バトミントン。嫌いな食べ物は、ピーマンとたまねぎ。そして、好きな人は……。遙茄…。うわっ！俺はなにを言ってるんだ！と…自己紹介はここで終わりだ。

俺は遙茄を待たせないためにも颯爽と階段を駆け下りた。

そして、奇跡にも近いといえるスピードで朝飯を喰い玄関へ向かった。

遙茄が、頬をふくらませて待っている。

そして今日の一言目を零した。

「ちょっと…テツ！遅すぎ！ありえない。あたし、15分待つてるんだけど。遅刻しちゃうじゃん。遅刻したらどーすんのよ。あんたのせいだからね。テツ」

遙茄はかなりお怒りのご様子だ。目つきも悪い。

「ごめん、ごめん…寝坊しちゃって…」

「あんた、いつも言い訳それじゃん！！もう！！！」

遙茄が起こりながらも俺の手を強引に引いてくれる。それはすこし嬉しかった。

いつもの通学路。田舎だからか、彼岸花がみちの隅っこに咲き誇っている。

俺は遙茄に連れられるままに学校に向かった。

まるで遙茄のが年上のようなようだった。

別にそんなことないけど。

今日は自棄に空が蒼いな…と俺は思った。

青々とした広い空を汚す雲はひとつもなく、白くひかる太陽がここぞとばかりに出張っていた。

俺は、見晴らしのいい屋上にいる。今は昼の時間。今日は俺一人。

なんだかみんなと食べるのが嫌だったんだ。何故だろう。嫌だった、みんなと群れるのが。

だから昼食の約束を断って、一人できた。屋上のなかでも俺のとっておきの場所に。

ここからだとかの広い青空のすべてが見えているような気がする。

まあ、それは俺の世界からみたものだけけど。

雲は有意義に、動いていく。それをみているとなんだか心が落ち着いて俺はそれが好きだった。

なんだか安堵できるのだ。空を見ていると。

何故だかは俺にもわからない。ただ、気持ちが安らぐのだ。

俺は雲を見ながら口にご飯をほおばった、そしてかまないで飲み込んだ。

なんだろう

…

今日はとっても嫌な予感がする…。

胸騒ぎは止まらなかった。

帰り、今日は遙茄と俺は帰る約束をしていた。

別になんとかなくだ。つきあっていたりなんかもしない。

遙茄のクラスの方が終わるのが早かったらしく遙茄はもう俺のことをドアの外で待っていた。

早くしろよ、という気持ちにじみ出ている遙茄の表情。ああ、じれったい。

早く終われ、終礼。うざりたい！じれったい。担任の守谷！別にお前のはなしなんかきかなくとも勘でわかるんだよ。はやく。はやく終わらせろ！終礼を！！！

俺は指先を器用に動かして念力をおくってみた。でも、無意味だった。俺の努力も守谷には効かなかった。

そんなこんなでいつのまにかさよならの挨拶は終わり、俺はリュックサックをしまった。

「なんであんたのクラスは、こんなに終わるの遅いのよー。待ちくたびれたよ。先にかえろう、と思ってたところだよ」

眉間にしわをよせて遙茄がいつてくる。俺はそれを流しながら聞い

ていた。

いつもの通学路。それを俺ら二人で歩いていく。そっけない、別れる前には似合わない馬鹿話をしながら。そう。この後俺は…俺は。遙茄と別れることになるのだ。信じられないこの先の未来は、笑いながら待っているのだ。

もう、俺の幸せな時間もなくなってしまう

…

狭い　　狭い交差点。

いつも通る交差点だ。

滅多に車は通らない。自棄に人ばかりが多い交差点。

俺は、ケータイを取り出そうとしてリュックをまさぐっていた。

なかなか、ケータイが見つからずむしゃくしゃし力をいれてリュックをかき混ぜていたら

手にケータイがぶつかって。

リュックから、思いっきりケータイが吹き飛んだ。

「わっ！」

これには驚きだった。まさか、こんなことがあるなんて思わなかった。

俺は、ケータイが地面に直撃し壊れるのを阻止するために、まだ赤信号である道路を横切ろうとした。道路には、見回しても車は走行していなかったからだ。
なのに　　…。

次の瞬間だった。ぶおおおおおおおん！！！！と雄たけびのよ

うなエンジン音が耳元に聞こえたかと思うと、いつのまにかひとつの自動車が俺にむかつて一直線で走行していたのだ。

運転席に座っている、運転手は酒を飲んだ後なのか…嫌なほど顔が真っ赤だった。

その上、ケータイで話しながら運転してる。

目の前の、俺に…気づいてない
……！！！！

轢かれる

逃げられない！！！！

俺は、ま逃れない未来に絶望し、恐怖を覚え、顔を蒼白にした。

「あ…あ…あああああああ！！！！」
無意味に叫んだ、次の瞬間だった。

どんっ！と強かに誰かによって押される。

でもそれは車ではない。

あたたかい、華奢な

遙茄の手だった。

俺は、押されて地面に転がり電柱にぶつかる。

遙茄は…どうなったんだ？

ごん！

そして、また音が鳴る。

何の音？

まさか…

まさか……

遙茄が、俺の身代わりに…。

「テツ、信号無視は

…いけない…よ…」

その、かすれきった声が止まった空間に響いた。

遙茄を轢いた、あの自動車は轢いたことに気づいてながらも慌てた顔をしながら猛スピードで逃げていく。

俺は、そいつを追うよりもただ　　ぐちゃぐちゃになった遙茄を見ていた。

もう、死んでいてもおかしくないのに遙茄はその澄んだ瞳で俺を見つめながら囁いた。

「テツの馬鹿…信号無視するから…こういうこと…になるんだよ…」
「なにいつてるんだよ！遙茄！！こんなときに…」

俺は、彼女にまもられたという事実をただの見込み情けない気持ちいつぱいで遙茄を見つめていた。

「テツ…正直いつて…ダサいあんたが好きだったよ」
遙茄のその純真なすべてを貫きとおすような声は俺の胸を鮮やかに貫いた。

「…そんな…俺のが遙茄のこと好きだったよ…」
俺は、虚しく、悲しく、悔しくなって、いつの間にかぼろぼろ涙を零していた。

高校生に似合わない。泣き顔を曝け出していた。

「じゃあね　　テツ…ありがとう」

その優しい言葉を最期に、遙茄は眼をつぶった。

ありがとう　　？そんな…それは俺が言いたかったこと。

好きだというのも、俺が一番　　…

はっと俺は、一瞬で顔が真っ青になった。

「ちよ…！！！！遙茄…！逝くんじゃねえよ！！遙茄！！！！！」

いくら呼んでも、いくら泣いても、いくら叫んでも。

俺が好きだった、あの遙茄は帰ってこない。

もう、二度と

帰ってこない。

「遙茄ああ…逝くんじゃねえよ…全部…全部俺のせいだ…」

俺は、涙があふれる目を情けなくて両手で覆った。

遙茄から流れる、生暖かい液体が俺の膝に足に制服に染みていく。

こんな最期が嫌だよ。悲しいよ。虚しいよ。寂しいよ…遙茄…はるか…。

俺を、いつも優しく引張っていつてくれたあの温かい手はもう、いない
…

俺のことをもう誰も引張ってくれない。

俺は、一人で歩かなきゃいけない。

もう…一人じゃないと。

遙茄はもういないのだから

。

顔をあげると、

ゆつくりと、赤く熟れた夕日が地平線のむこうに沈んでいく。

そして、その光に紛れて赤い赤い血のような色をした

彼岸花がゆつくりと散っていた。

風は俺の髪の毛を緩やかに揺らしていく。

木の葉は俺の横を流れ、

遙茄が死んでも、すべての時は動いていた。

俺だけが止まるなんて

いけない。

俺だって、ひとりで歩かなくちゃいけない。

俺は、立ち上がった。

夕日を背に。

救急車を呼ぼうと地面に落っこちても軽い損傷ですんだケータイに手をかける。

そして、番号を押ししゃべった。

「あの…今、事故があつて……………」

伝え終わると俺は、遙茄を見つめてつぶやいた。

「俺　一人でも頑張つて…みるよ…遙茄…今まで
一息すい囁く。」

「ありがとうな。」

その声は、風に乗せてその空間に響いたのだった

…

（後書き）

ラブストーリーかはわかりませんが私的にはラブストーリーのつもりでかきました…。

これは最初、主人公の自立をテーマにかこうと表いたのですが最後の方になってごっちゃまぜになってよくわからなくなってしまいました…すいません。

初心者で、まだ描き方が未熟ですけど今後ともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9242b/>

ありがとう。

2010年10月11日11時59分発行